

《メッセンジャー》

作・佐野和敏

《登場人物》

- ① 村上 蛍 (むらかみほたる)
② 太田 さくら (おおたさくら)
③ 木村 楓 (きむらかえで)
④ 榎本 純玲 (えのもとすみれ)
⑤ 今西 達也 (いまにしたつや)
⑥ 辻 真太郎 (つじしんたろう)
⑦ 客① (梶谷美加・かじたにみか) / 久美役 (劇中劇)
⑧ 客② (梶谷健司・かじたにけんじ) / チャラ男・セバスチャン役 (劇中劇)
⑨ 客③ (近藤久美・こんどうくみ) / サンタクロース・美加役 (劇中劇)
⑩ 客④ (鈴木三太・すずきさんた) / 健司役 (劇中劇)
⑪ 車掌 (しゃしょう)

ノリのいい音楽がかかっている。
暗闇の中から声が聞こえる。

さくらの声「ああ〜！却下、却下、大却下！！」

明かりがつくと、そこは劇団サンフラワーの稽古場である。

テーブルの上にラジカセが置いてある。

イスに座っている団員の太田さくらがいる。

その周りに団員・木村楓、榎本純玲、今西達哉、辻真太郎がいる。

やや離れた場所に力なく座っている、座長・村上蛍。

蛍、さくら、楓、純玲は創設メンバーであり、達哉、真太郎は後輩である。

楓 「まだ続きがあるのよ！（ラジカセのスイッチを押し、刀を抜く）シャ

キ〜ン！！（架空の相手を斬る）ぶうわさ！ガヴァ！ザバ！サバ！ア

バ！カバ！THE・糖一（座頭市）！ウシャシャシャシャ〜！！」

さくら 「はいはい。もういいから（ラジカセのスイッチを切る）」

純玲 「じゃあさ、こういうのは。（ラジカセのスイッチを入れ、刀を抜く）シ

ヤキーン！赤城の山も今宵限り、生まれ故郷の国定の村や、縄張りを捨て、国を捨て、可愛い子分のためえ達とも別れ別れになる首途だく」
団員たちが突然子分になる。
それを見て戸惑うさくら。

楓 「(子分) 親分！」

達哉 「(子分) 親分！」

真太郎 「(子分) ああ、雁かりが鳴いて 南の空へ飛んでいかあ！」

達哉 「カア、カア、カア……」

真太郎 「それは、カラスだよ……雁かりだよ、雁かり」

達哉 「純玲さん、雁かりって、どう鳴くんすか？」

純玲 「？(知らない)、首を振る)」

達哉 「楓さん」

楓 「？(知らない)、首を振る)」

達哉 「(真太郎を見る) 知らないか」

真太郎 「おい！確認しろよ。まだ首とか振ってないし」

達哉 「どうせ知らないだろうと思つてさ」

真太郎 「そんなの確認してみなきや分かんないだろ」

達哉 「分かった。悪かったよ。じゃあ、もう一回。カア、カア、カア……」

真太郎 「それは、カラスだよ……雁だよ、雁」

達哉 「雁つて、どう鳴くの？……純玲さん」

純玲 「？（知らない、首を振る）」

達哉 「楓さん」

楓 「？（知らない、首を振る）」

達哉 「真太郎くん」

真太郎 「？（知らない、首を振る）」

達哉 「知らないのかよ！」

真太郎 「知らないよ」

達哉 「じゃ、なんでもう一回やり直させたんだよ」

真太郎 「いや、やり直したのはおまえだろ。俺は確認してみなきや分かんないだろ。つて言っただけで」

さくらが止める。

さくら 「うああ！もう！！そんなこたあ、どうでもいいのよ！！それより、この小芝居は一体なんなの！！」

楓 「いやね……だから！国定忠治っていうのはどうかなあ〜っと思って」

さくら 「国定忠治って……なに？」

楓 「あれ？知らない？」

さくら 「あんたたち知ってるの？」

真太郎 「はい。昨年の演劇祭で他の劇団がやってたんで。さくらさん、観てないっすか？」

さくら 「ああ……あの時の？なんかよく分かんなくて眠くなっちゃってさ……」

達哉 「え、寝ちやったスカ？」

さくら 「うん」

達哉 「うんって……そんなあつさり……」

純玲 「分からなくなっちゃうとすぐ寝ちやうのよこの人」

さくら 「うるさいわね！もう！そんなことはどうでいいの！問題はそういうことじゃなくて！どれもみんなパクリじゃない」

楓 「パクリって人が悪いなあ……そりゃ、多少はベースになってるとこは似てるけど、完全にオリジナリテイ溢れるオリジナルですよ！」

さくら 「どごがよ！ノリのいい曲かけたって、あんた『座頭市』って言ったじゃない。じゃあ『ウシヤシヤシヤシヤ』にすれば良いんじゃないの」

楓 「何言ってるのよ？タイトルの響きこそ似てるけど、アクセントのニュアンスが違うのよ。文字にするとハッキリとした違いがあるんだから」

さくら 「文字？」

楓 「(たっぷりと勿体ぶるように)ローマ字でテイ、エイチ、イーで……ザ

(THE)。砂糖の糖で、糖！。漢数字の一で、一！。名付けて、THE・糖一」

さくら 「(呆れつつ)なにそれ？どういいう話なの？」

楓 「(熱く語るように気取って)糖分が人の体には良くない。だが、その糖分が入っていると美味しい。人はなぜ糖に引かれるのか。そしてなぜ、糖を敵視するのか。糖を敵役として研究者たちを侍に見立て、時代劇風に侍という過去の人物に視点をあてて……この人間としての大きなテーマをですね……」

さくら 「却下」

達哉 「そこに行くと自分のはやっぱオリジナリティに富んできますよね？どうでした？『山頂から』っていう、この素敵なネーミング！」

純玲 「それさ、ネーミングの問題じゃなくて短すぎでしょ。練習課題でやったやつじゃない。そこいくと、わたくしの(外人ぼく)「tyuji・

kunisada(忠治・国定)」ネーミングこそまだただけど、ち

よつと伝統的な古典の香りが湧き立つ、重みを感じるでしょ？」

さくら 「あんたのは、何の捻りもなさすぎじゃない。去年の他の劇団の作品でしょ」

純玲 「この間、時代劇チャンネルでも深夜にやってたのよ。ワビサビがあっ

「ていい作品だったなあ！」

真太郎 「先輩、時代劇チャンネル契約してるすか？」

純玲 「まあね。ずっと時代劇しかやらないから最高の、の、よ！必殺シリーズ

ズなんかもう大感激よ！何回観ても見飽きないわね」

さくら 「いい！わたし達は有りものじゃなくて、オリジナルティにこだわりたいのよ。ねえ、蛍」

蛍 「うん……まあね」

さくら 「ちよつと、蛍。どうしたのよ。最近元気ないじゃない」

蛍 「うん……」

楓 「どうしたのよ！？」

純玲 「なんか不満があるならハッキリ言ってよ」

蛍 「うん……不満とか……そういうんじゃないんだけど……」

楓 「なに？」

蛍 「うん……実は……劇団を辞めようかと思ってる……」

さくら 「ちよつとなに言いだすのよ！？なんで？」

蛍 「解散とかした方が良いのかな……とか……」

純玲 「ちよつと、何言ってるのよ」

さくら 「そろそろ潮時なのかなあって……」

楓 「座長がそんな弱気でどうするのよ」

さくら 「そうよ」

楓 「そうよ」

蛭 「座長って言っても名ばかりだし。あたしにみんなをまとめる力なんてないし」

純玲 「そんな事ないわよ。いままでだって蛭がしつかりやってくれたから、ここまで頑張って来れたんじゃない」

蛭 「演劇祭でなかなか上位に食い込めないのも……わたしの作、演出が良くないからだと思っし……」

達哉 「そんな事ないっすよ。俺、座長の本とか演出が好きでこの劇団に入ったんすから」

蛭 「(力なく) ありがと……」

真太郎 「俺だって、座長の芝居が素敵だったから入れてもらった、ですよ」

蛭 「(力なく) ありがと」

楓 「どうしたのよ？」

蛭 「なんか……最近……わたしなんか、なんの力もないし、みんなの役に立ってないのかなって……」

純玲 「いや、だからそんな事ないって」

さくら 「そんなに一人で責任感じなくても大丈夫よ。この劇団作る時にみんなで頑張っって、みんな演劇祭で優勝しようって決めたじゃない」

真太郎 「そうだったんすか？」

純玲 「うん。まあね。意気込んで学生の時に4人で作ったのよ」

楓 「それで、さくら、純玲、楓という花にちなんだ名前の三人で『サン(3)』

フラワー』

達哉 「おしゃれすね〜」

純玲 「蛍だけは花の名前じゃないけど、それぞれの花を照らす蛍の灯りのように。ってこともあったし、蛍はまとめるのが上手かったから座長にしようってことで一致したのよ」

さくら 「それで、作、演出も蛍が一番センスあるからってことで」

真太郎 「素敵な話しじゃないっすか」

さくら 「ありがと」

楓 「もしも解散するなら、みんな決めてみましょう」

純玲 「そうね。でも、まだその時じゃないわ」

さくら 「まだまだやれるわよ。ねっ、だから蛍も元気出して」

蛍 「うん……ありがと」

純玲 「大丈夫よ。いい作品できるって」

さくら 「で、みなさん、どう？なんかない？」

真太郎 「ん……さくらさん。そんな簡単にオリジナリテイって言いますけどね、僕らは作家じゃないので……なかなか……単純には話しが思いつかないわけ……はい」

さくら 「そりや分ってるわよ。でもね、毎年レベルが上がってきてて、既製の作品じゃなかなか上位に食い込めないのはみんなも知ってるでしょ？ 蛍一人に頼り切っていないで、みんなで力を合わせて切り抜けましょう」

純玲 「そうね」
よ」
さくら 「なんか、考えてよ、みんな」

沈黙

達哉 「あのお……さくらさん……一口に考えろと仰つてもですよ……」
真太郎 「そうなんですよ……何をどう考えて良いのやら……それさえも思いつかないつすもんねえ……なんか、考え方っていうかコツっていうか、そういうのをご教授頂けないものでしょうか」
さくら 「んん……コツ？……考え方ねえ……わたしも作家じゃないからなあ……ねえ、蛍、なんかコツとかないのかな？」

蛍が突然倒れる。

焦る団員たち。

暗転中に救急車のサイレンの音。

暗転

チンチン電車の走る音が聞こえる。
ベルの音が鳴る。

灯りが付くと、蛍がイスにうなだれて座っている。

車内には乗客がいる。イスに座っている者もいれば、小慣れた感じでウロウロしている者もいる。

車掌が切符の確認をしている。
車掌が蛍を起こす。

車掌 「もしもし、お客さん……お客さん」

蛍 「(目を覚ます) ん……?」

車掌 「お休み中のところすいません。切符を拝見します?」

蛍 「切符……? どこですか?」

車掌 「切符をお願いします」

蛍 「切符?」

車掌 「確認するだけですから」

蛍 「はい……ちよつと待ってください。(切符を探しながら) あたしいつの間に乗ったんだろ……」

その様子を見ていた客①が蛍に近寄ってくる。

客① 「あれ？もしかしたらまだこの状況が掴めてない？」
蛍 「？……え？」

客②が離れたところから声をかける。

客② 「しようがないよ。まあ、最初はそういうもんよ」
車掌 「そうでしたか。これは失礼しました。では、ご説明致しましょう。こ

こは列車の中です」

蛍 「それは分かります」

車掌 「迷宮列車の中です」

「！！……迷宮列車……？」

客③ 「つまり！あなたは死んだということ」

蛍 「ええ！わたし死んだの！？」

客② 「ああ、やっぱりまだこの状況が飲み込めてないみたい」

客④ 「ですよ。いきなり死んだって言われてもねえ」

呆然とする蛍。

蛭 「……え？……わたし死んだ？……なんで？」

全員 「さあ？」

蛭 「（独り言）最近、イマイチを人生に後ろ向きだったような……悲観的だったような……気もするけど……まさか死ぬとは……我は、生き急いだか……」

車掌 「我は……なにか、深いお言葉ですねえ」

蛭 「ということとはここは？」

車掌 「亡くなった方をあの世にお連れするための列車です。いわば、あの世とこの世を繋ぐための列車。名付けて」

全員 「（明るく）迷宮列車！」

蛭 「そんな全員で揃えなくても。しかも、ニッコニコで！」

車掌 「では、ご理解いただいところで切符をお願いします」

蛭 「ああ……はい……切符、切符……？でも……私は目が覚めたらここにいたんだから……切符なんて買ってないし」

客① 「ほとんどの霊が」

蛭 「霊？」

客② 「そう。我々は靈魂みたいなものなんですよ」

客① 「ほとんどの、霊が……あっ、いや、人が、ここへ来たときには眠っている状態だから、切符を渡されたという認識はないのよ」

客③ 「ちなみに私は目が覚めたら、切符を握ってたわ」

蛭、握っている両手を開く。なにも持っていない。

客② 「私は、パンツのポケットにクチャクチャになって入ってました」

蛭、パンツのポケットを探るが入っていない。

客① 「私は上着の胸ポケットでした」

蛭、上着のポケットを探るが入っていない。

客④ 「私は、目が覚めた時に車掌が渡してくれました」

蛭 車掌 「そんなこともあるんですか？」

「ええ、まあ、たまにですけど。亡くなってからここへ来る方と、ここへ来てから亡くなってしまう方は、私が手渡す場合があります」

全員が納得する。

蛭 「じゃあ、私の切符も持ったりするんじゃないですか？」

車掌 「いいえ。私は持ってません。よく探してみてください」

蛭が切符を探すが、やはり持っていないようである。
客たちがざわつく。

車掌 「切符を持ってないということは、あなたはまだ……」
全員 「死んでない」

全員が期待の目で蛭を見て大喜びをしている。

客全員 「やった〜！」

客② 「イエ〜〜い！！」

客③ 「やつほ〜〜！！」

客① 「ついにやりました！」

客④ 「ラッキー！！」

客たちは握手をしたり、抱き合ったりして喜びを分かち合っている。

車掌 「良かったですね」
蛭 「え？……あのお……どういことですか？」

客① 「あなたはまだ死んでないということですよ。こん睡状態かなにかで生死の狭間をさまよっている状態ですよ」

蛭 「はあ……」

客② 「まだあの世に行かなくてもいいかも。ということですよ」

蛭 「いいかも？……って、また微妙なニュアンスですね」

客③ 「死ななくてもいいということが良いことじゃないですか！」

蛭 「それは、そうですね……なんで皆さんがそんなに喜んでくれるんですか？そんなに喜ばれても、なんか複雑な感じが……」

客④ 「こんなに嬉しいことはありませんよ。喜んでください。さあ！」

蛭 「はあ……」

車掌 「実はですね……この方たちは成仏できない人たちなのです」

蛭 「成仏できない？どういうことですか？」

車掌 「この方たちは、この世にいろいろな未練や執着があつて、あの世へと行かれない人達なのです」

客① 「ですから、わたし達はこの迷宮列車で成仏できる時を待ち続けながら、この列車と共に迷宮を彷徨っているのよ」

蛭 「はあ……なるほど。それはお気の毒な。でも、それと私とどういう関係が……？」

車掌 「まだ、亡くなっていないあなたは、あの世、つまり死後の世界のことです。それと、この世と言われる、生きている世界、人間界のことと

蛭 すが、それを繋ぐメッセンジャーの役割をすることが出来るのです」
「メッセンジャー……？」

車掌 「はい」

蛭 「どういうことですか？」

車掌 「あの世とこの世には繋がりがあるのです。あなたがまだ亡くなっていないということは、あなたはまだあの世にもこの世にも、行ける可能性がある。噛み砕いて言えば、死ぬこともできるし、生き返ることもできるということですよ」

客② 「そうですね。あなたは生き返って生前の世界に戻れるということなんですよ」

客③ 「しかも、あなたの意思で」

蛭 「私の意思で？」

客④ 「そうですね。そのチャンスが与えられたのです」

蛭 「チャンス？ 与えられた？ 誰がそのチャンスを与えたのですか？」

客① 「くれたんじゃないかって、掴んだんですよ」

蛭 「掴んだ？」

車掌 「そうですね。自分でチャンスをつ掴んだんです」

蛭 「そういうことは、私はなんか持つてるのか……」

車掌 「いい『運』をお持ちなのかもしれませんよ」

蛭 「運ですか……」

車掌

「はい」

客

「私はまた生き返れるということですか？」

車掌

「はい」

客

「生き返れるのか……別に死にたくはなかったけど……生き返ってもいいことありそうもないしなあ……悩みばかりだし」

客

「もし、あなたがそのチャンスをいらないうって言うなら、そのチャンスを私に譲ってくれないかな？」

客

「譲る？ そんなことできるんですか？」

客

「ええ、まあ。ご本人が譲るといふのであれば」

客

「私は出来ることなら、もう一度生きたい。今度はまっとうに生きてみたいんです」

客

「まっとう……？ 道……外れちゃったんすか？」

客③が合図すると、突然、客①が久美役になり、その時の状況を再現し始める。

久美が一人で呆然として打ちひしがれた様子である。

久美

「どうということよ！ どうということなのよ！？ なんて私がふられなきやい

客③ 「けないのよ」
「付き合ってた彼に突然告げられました」

客③が客②を指さすと、客②がチャライ彼氏役になり登場する。

チャラ男 「ああ、久美。悪いけどさオレと別れてくれないかな。なんかさ、気になっちゃう子がいてさ。声かけたら『付き合ってもいい』なんて言われちゃってさ」

久美 「ちよつと待ってよ。どういうことよ」

チャラ男 「だから、そういうことよ。久美さ、夢ばかり追っかけてるから、貯金も底ついてきちゃったでしょ」

久美 「オレも久美の夢、応援するよ。久美の貯金がなくなってきたやつたから、今度はオレが頑張ってるのよ、今でも。これからも、ずっと。でもさ、

チャラ男 「気持ちは応援してるのよ、今でも。これからも、ずっと。でもさ、やっぱりお金は大事だよ。それに、オレ、ほら、頑張ってる働くつてゆうのはさ、性に合わないみたい」

久美 「なによ、それ」

チャラ男 「その子がかわういい（可愛い）のよ。それにお父さんがお医者さんなんだって。悪いね。じゃあね〜！またね〜！バイバイ〜！（去る）」

客③ 「私はなんにも悪い事なんてしてないのよ。それなのに……」

久美 「クソッ！あのクソチャラ男！許さねえぞッ！ぶっ殺したる！」

久美がパソコンを打っているような動きをしている。

客③ 「私はヤツに復讐してやろうとネットでハーブドラッグを手に入れた（手に持つてる風に）」

客③が持っている袋を久美に渡す。

久美 「これをヤツに嗅がせて、廃人にしてやるぜ！ざまあみろ！……待てよ、

これって本当に効くのか？偽物じゃないよな？」

客③ 「私は確認のために少しだけ試してみようと思った」

久美 「これって、やり方がよく分からないな。タバコみたいにして吸うのかな？ハーブっていうぐらいだから紅茶みたいに飲むのかな？」

客③ 「結局、私は取りあえず舐めてみた」

久美がハーブを舐める。苦しんで倒れる。

客③ 「ハーブは本物だった。しかも私はかなりヤバいものを手に入れていた

ようで効果は抜群だった。私はそのまま……ここへ来てしまった……

私は殺人犯にならずに済んだ。でも、誰にも何も言えずに人生は終わった。私は売れないミュージシャンをしていた。いつか売れると信じて、夢を追いかけていた……きつと世間的には彼氏にふられて自殺をした、バカな売れないミュージシャンと思われるに違いない。でも、せめて母親だけには事情を分かってもらいたかった。そのために、チャンスがあるのなら譲ってほしい。そしたら必ず」

客③・久美「(客②を指さし) あのチャラ男をブツ飛ばしてやる！」

焦る客②。

客④ 「あのう、もし可能なら私も譲っていただきたいです」

蛭 「え？あなたも……ですか？」

客④ 「実は私は、サンタクロースです」

客③ 「！？サンタクロース？あんた舐めてるの？訳のわからないことを言うて」

客④ 「ああ、すいません。鈴木三太と言いまして数字の三に太いと書いて三太です」

客③ 「そういうこと」

客④ 「サンタクロースというのも本当なんです。グリーンランドの国際サンタクロース協会認定のサンタクロースです」

客② 「へえ〜！そんな協会があるんですね」

客④ 「はい。世界サンタクロース会議にも出席しております」

客① 「会議なんいうのもあるんですか？」

客④ 「もちろんです」

蛸 「で、なんでそのサンタさんがここにいるんですか？」

客③ 「そうよね」

客④ 「それは……子供たちにプレゼントを配っている時でした」

客④が③に合図をする。

客③ 「え！？あたし？あたし女だよ」

客④ 「（無視して）そう。それはイブの日です。わたし達サンタが一年でもっとも忙しい日です」

客④がサンタクロースの人形を出し、客③に渡す。

客③はその人形を胸ポケットに入れるとサンタになり再現を始める。

客③ 「そう！私の名前はサンタクロース！さあ、次はどこに配達かな！ホオ、

ホオ、ホオ」

客④ 「さあ、次の子供たちのところに行くぞ！いざ出発だ！トナカイのセバ

スチャーン！」

サンタ 「(客②を指し) セバスチャン！来い！」

客② 「セバスチャン！？えく…：…：チャラ男とかセバスチャンとかじゃなくて

もつといいのが良いよ」

サンタ 「こら！ゴチャゴチャ言わない！出でよセバス！」

客②が嫌々セバスチャンになる。

客①④がロボットのよう合体し、ソリに変身する。

ソリに飛び乗るサンタ。

サンタ 「出発だ！セバス！」

セバス 「(馬のいななきのように) ブルンブルンブルン。ヒヒン！」

サンタ 「お前は馬か」

セバス 「トナカイってどうやって鳴くの？」

客④ 「さあ？」

サンタ 「この際なんでも良いわよ！とにかく行くわよう！」

セバス 「了解！(レーシングカー風に)ブルン！ブルン！ブルン！キィンンンン！」

客④ 「私とセバスチャンは幼稚園や保育園など疾風のごとくプレゼントを配りまくりました」

サンタとセバスチャンが勢いに乗って配達している。

サンタ 「メリークリマス！メリークリスマス！ハイヨ！シルバー！！飛ばせ

セバス！ホオ、ホオ、ホオ」

客④ 「残りもわずか、まもなく夕方、という時間帯です」

サンタ 「セバス！まもなく日が暮れて来るぞ！さあ！さらに忙しくなるぞ

お！！」

客④ 「私とセバスチャンはラストスパートをかけた。残り一軒。ラストの保育園が終わり煙突から出てきたその時だった。私は配り終えた安心感からか、僅かに油断した。私の一瞬の隙について屋根に積もった雪が私の足をすくった」

客③が人形を使ってサンタが落ちていく状況を再現している。

サンタ 「うわあく！あく！」

客④ 「その屋根から私は真つ逆さまに落ちたのです。私にはなすすべもなかった。私は地上に叩きつけられました」

サンタ 「そして、そのままここにいる。私には使命がある。まだまだやり残したことがある」

蛭 「気持ちに分かりますが、それって、不注意で足滑らせて落ちたってこ

とですよね」

客④ 「(動揺しつつ) ええ、まあ……状況はともかく、私に譲っていただきました
い」

サンタ・客④ 「使命のために」

困る蛭。

蛭 「(客①②に) あの、あなた方は良いんですか？この機会にもう一度戻り

たいとは思わないのですか？」

客① 「わたし達は良いんです」

蛭 「良いって……？」

客② 「実はわたし達は夫婦なんです」

蛭 「そうなんですか？」

客① 「はい」

客② 「私の名前は梶谷健司。(客①を指し) こっちが妻の美加です。わたし達
は滞りなく式を挙げ、楽しく幸せな時間を過ごしました」

客① 「わたし達は式の翌日に新婚旅行に行きました」

客③④が健司・美加になり、空港で友人たちに手を振っている場面を再
現している。

健司 「みんな本当にありがとう！楽しんでくるわ」

美加 「ありがとう！みんなにお土産買って来るから楽しみにしててね」

健司 「（見送りの人達に）うん！分かった！気を付ける！」

美加 「（見送りの人達に）大丈夫よ！健司と一緒にだもん。（健司に）ねえ〜！」

健司 「（バカッブルっぽく）ねえ〜！」

客② 「わたし達は空港まで見送ってくれた友人たちに別れを告げ、ラブラブで旅立ったのです」

客① 「わたし達の旅は順調で最終日に氷河を見に行ったのです」

美加 「（氷河を見ている）すごいわねえ！」

健司 「（氷河を見ている）すごいなあ！圧倒されて言葉がでないなあ！」

美加 「これが氷河なのね！大自然に包まれてるって感じ」

健司 「確かに」

美加 「ねえ、早速行きましょうよ」

健司 「よし。出発しよう」

客① 「わたし達はハイキングコースを回りながら楽しく観光しました」

健司と美加が、はしゃいだり写真を撮ったりしながら観光している。

客② 「しかし、気付くとわたし達はコースからかなり外れてしまっていたよ

うでした」

美加 「ねえ。なんか随分氷だらけな感じになっちゃったけど、違うとこ歩いてない？」

健司 「（軽い感じ）あれ！？……迷ったかな」

美加 「大丈夫？」

健司 「（軽い感じ）大丈夫、大丈夫。一旦、来た道に戻ろうよ」

美加 「そうね」

客① 「わたし達は来た道に戻り始めた。戻り始めてまもなく、私はヒドンクレバスに落ちてしまったのです」

蚩 「ヒドンクレバスっていうのは……？」

客② 「ヒドンクレバスというのは、氷河の上に割れ目があるとところがあります。これをクレバスと言うんですが、その割れ目の上に雪が降り積もると割れ目が見えなくなつて落とし穴のような状態になっていることがあります。これをヒドンクレバスと言います」

蚩 「なるほど……」

客② 「私も命綱で体を繋ぎあわせていたので、一緒に落ちてしまいました」

客① 「幸いにも大怪我は免れたのですが……」

客② 「わたし達はハイキングだったので装備もさほどありません」

客① 「わたし達は励ましあいながら救助を待ちましたが、寒さに勝てず力尽きました」

客②

「そのままわたし達はここにいます。もし、あなたのチャンスを譲ってもらえたとしても、どちらか一人がここに残らなければなりません」

客①

「どちらか一人が残るぐらいなら、わたし達は二人でここに残ることを選びます。あの日のように」

蛭

「では、なんでこの迷宮列車にいるのです？なにか心残りがあるからここにいるんですよね？」

客②

「実はわたし達はまだ発見されていないのです」

蛭

「発見されてない……？ということとは……」

客①

「そうです。わたし達の体はまだ遭難した場所にあります」

客②

「その場所からわたし達の体を見つけて欲しい」

客①が手紙を取り出す。

客①

「この手紙の中に遭難した場所が書いてあります。これを家族に渡して欲しいんです」

客②

「ですから、どなたが生き返っても良いのですが、この手紙を届けて欲しいのです」

沈黙

蛭 「私にはどうしていいのか分かりません。私はどうすれば良いのでしょうか？」

車掌 「私にも分かりません。あなたがお決めになりなさい。ただし、時間はそうありません」

蛭 「時間がない？」

車掌 「はい。もうまもなく『ポスト前』という駅に到着します。そこで誰かが降りなければ、このチャンスはなくなりです」

蛭 「なくなる？でも、私はまだ死んでないんじゃない？」

車掌 「あなたも迷宮列車に乗り続ける可能性があります」

蛭 「迷宮列車に乗り続ける……」

客③ 「あなたはなぜ迷ってるの？」

蛭 「なぜ迷ってるんだらう？」

客④ 「なにに迷ってるのですか？」

蛭 「なにに？」

客④ 「そうですね。生き返れるとか戻れるというのは、そんなに迷うようなことなのですか？」

客③ 「迷っているということは、戻らなくても良い。または、戻りたくないということでしょう？」

客④ 「(①②を指し) そちらのお二人も生き返らなくてもいいと言っている。だが、我々は生き返りたいと言っている。簡単な事じゃないですか、

我々のどちらかを選んでくれればいいんですよ。私には使命がある。

（客③を指し）こちらは誤解を解くという母への愛、夢と目標、そして復讐という大きな野望がある。（蛍に）あなたには戻る理由は無いんですよね？」

客③ 「そうよ。わたし達のどちらかが選ばれたら、ちゃんとみんなのメッセー
ージも届けるわ」

客① 「あのおー、あなたはなんで迷っているのですか？」

蛍 「私は……友人たちと劇団をやっていたのですが……」

客② 「劇団ですか！素敵じゃないですか」

蛍 「なかなか成功しなくて……」

車掌 「成功……難しい問題ですね」

蛍 「なんか……全てにおいて自信がなくなってしまう……才能ないの
かなあーって……」

客③ 「あのね、才能が有る、無いつていうのは自分で決めることじゃないの！
周りが評価してくれることなのよ。自分で自分の才能なんて分かるわ
けないじゃない。そんなことが分かっていたら、私だってミュージシャ
ンになりたいたって思ってたかもしれないし」

車掌 「人生に迷わない人なんていないものですよ」

客④ 「人はいつも迷ったり悩んだり苦しんだりして生きるものなんですよ。
だから、楽しいんですよ。生きるのは大変だけど、でも、それが生き

客②

「てるってことなんですよ、きっと……」

「悩みの無い人なんていないんですよ。悩みが無かったら本当に幸せですか？」

蛭

「悩みが無かったら……」

車掌

「生きる上で大切なことはなんだと思いますか？」

蛭

「大切なことですか……」

客①

「一生懸命に。ということですよ」

客②

「後ろ向きになる時があってもいいじゃないですか。でもまた前を向いて立ち上がることが大切なんじゃないですかね」

車掌

「人には多かれ少なかれ悩みはあるものです。それが、人なんです。窓の外を見てください」

外を見る蛭。

蛭

「人が……歩いています。あれは？」

車掌

「この世の、生きている人間です」

蛭

「こんな近くに電車が通っていても気づかないんですね？」

車掌

「ええ。あちらからは見えませんから」

蛭

「ああ。やっぱり」

車掌

「まもなく『ポスト前』という駅に到着しますが、そこに赤いポストが

設置されています。そのポストに手紙を入れると、あの世に届くと言われている、みなさんああやって、手紙を出すためにポストに向かっているのです」

「本当に届くんですか？」

「届きます。あの世には。でもこの迷宮列車に乗っている人達には届きません。しかし、あなたのような方がこの迷宮列車に乗ってきた場合は、生き返る人にこちらからの手紙を託せるのです。ですから、この方はみなさん手紙を持っています。この世の誰かに届けたいメッセージを書いて」

「それが、この迷宮列車に乗っている理由でもあるわけですね？」

「そういうことになります。生きている人もあの世に旅立っていく人もみんな誰かに伝えたい想いがあるのです。あなたもまだまだ伝えたい想いがあるんじゃないですか？」

「伝えたい想い……」

「それを作品にしてみてはいかがですか？」

「そうか……ここしばらく……賞が欲しいとか、劇団の知名度を上げたとか……そんな事ばかりを考えて作品を作った気がする。審査員受けするような作品ばかりを。でもそうじゃないんだ。私の想いを伝えなかったから劇団を作ったんだ。そうか……わたし達はメッセングヤーなんだ」

客① 「わたし達はあなたにこの手紙をお願いしたいんですけど」

蚩 「え？」

客② 「わたし達の眠っている場所が書いてあります。家族と友人たちに渡してください」

蚩 「あの、でもまだ私決めたわけじゃ……こちらの方達のチャンスもあるわけですし……」

客④ 「わたしもあなたにお願いします。わたしのは手紙の他にこのプレゼントも渡して欲しいんです」

と、サンタクロースの人形を出す。

蚩 「これは……？」

客④ 「配達が終わったあと、娘に渡すはずだったプレゼントです。一緒にお願います」

蚩 「そうだったんですか……ごめんなさい、不注意だなんて言っちゃって……」

客④ 「いいえ、いいんですよ。わたしも浮かれて……本当に不注意だったんですから」

客③ 「私のもお願い」

手紙を渡す客③

蛭 「あ、でも……」

客③ 「それから、もし機会があつたら、(客②を指し)あいつに一発ガツンとお見舞いしといてくれる！」

客② 「ええ！？それは私ではありませんよ」

客③ 「ああ、そうだった。ごめんごめん」

蛭 「でも、私……皆さんの……そんな大役が務まるか……」

車掌 「大丈夫。できますよ。あなたは女優さんなんですから」

蛭 「はあ……でも、本当にいいですか、私で」

客① 「あなたがいいんです。(周りに)ねっ？」

みなが頷く。

『チンチン』と列車が駅に到着する音。

車掌 「(アナウンス)まもなく、『ポスト前』に到着しまーす」

列車が止まる音。

ドアが開く。

蛭が列車を降りる。

蛭 「すみません、皆さん。私が戻ることになってしまつて」

客④ 「そんなことありません。あなたが一番適任です。みんなのメッセンジ

ヤーとして……頼みます（手紙と人形を渡す）」

客② 「あなたならきつとやってくれると信じてます（手紙を渡す）」

客③ 「頼んだわよ（手紙を渡す）」

客① 「お願いね（ハグをする）」

蛭 「はい。必ず！必ず届けますから。車掌さん、私なんとお礼を言つてい
いか……」

車掌 「皆さんがあなたを選んだんです。あなたを信じて」

「ありがとうございます。ありがとうございます。私、もつと足掻いて、もつ
ともがいて、精一杯生きます。本当にありがとうございます」

客達と車掌が微笑んでいる。

ドアが閉まる。

列車が発車する音。

暗転

劇団サンフラワーの稽古場。
劇団員たちがミーティングしているがどこか力がない。

さくら 「万策尽きたか……」

真太郎 「はい。残念ながら」

純玲 「やっぱりうまくまとめる人がいないとねえ」

楓 「意見は出るけど、なかなかまとまらないわねえ」

さくら 「なんだかんだ言っても、蛍がまとめてくれてたもんねえ」

達哉 「そうっすねえ……やっぱり座長の力は大きいっすねえ」

真太郎 「確かに」

純玲 「そろそろ作品が決まらないと、本当に今年は欠場なんてことになっち

やうわよ」

楓 「蛍のためにもそれだけは避けたいわね」

真太郎 「そうっすね。ここはやっぱり座長のためにも我らで乗り切らないとで

すね」

さくら 「そうね。寝たきりだけど蛍もきつと戦ってるわよ」

達哉 「絶対出ましよう！」

純玲 「そうね！こんなところで弱音を吐いてないで、蛍の分まで頑張りましょ。

蛍の方がもっと苦しんでるわよ」

突然、出入口の扉が開く。

蛍が仁王立ちで立っている。

蛍 「苦しんでなくい！！」

全員が驚きを隠せない。

純玲 「蛍……」

達哉 「座長……」

楓 「うそ」

真太郎 「生きてる」

さくら 「出た」

蛍 「諸君、わたしは死んではおりません」

純玲 「それは知ってるけど……」

楓 「……意識が戻らないって」

蛍 「戻りました！しかもこんなに元気ななって帰って参りました！」

さくら 「……大丈夫なの」

蛍 「イエス・オフコース！」

純玲 「ちよっと空回ってる感があるけど無理してない？」

蛍 「無理はしておりません！」

真太郎 「本物ですよね……？」

真太郎がチャラ男と同じ柄のシャツを着ている。

蛍 「あっ！チャラ男！テメエ、よくも久美ちゃんを……騙しやがって」

真太郎の胸倉をつかむ蛍。

周りの団員が慌てて蛍を止める。

真太郎 「なにするんですか！？」

蛍 「ごめんごめん。ちよっと似てたもんだからから」

楓 「似てたって誰に？」

蛍 「何でもないわよ」

さくら 「本当に大丈夫なの？」

蛍 「大丈夫よ！それより、みんなビクニユースがあるわ。新しい台本が
出来ました」

達哉 「出来ました、って、いつ書いたんすか？」

蛍 「夕べ、意識が戻ってから書いたのよ」

純玲

「そんなに早く書いたの？」

蛍

「うん。早くしないとこの構想を忘れそう。迷界と言われる場所で使たちが生まれ変わるか否かという選択を迫られるという話しよ」

達哉

「迷界すか？」

蛍

「そう。『もし』あなたが天使で、もう一度生まれ変われるとしたら、生れるか？それともやめるか？『生きるとは』というメッセージを、観客に問いかける作品にしたいのよ」

楓

「……『もし』……？」

蛍

「うん」

真太郎

「なんか、深いっすね」

さくら

「面白そうじゃない！」

蛍

「みんなの力が必要なの！一緒に作りましょ」

純玲

「で、どうするの？」

全員

「一週間で覚えて。キャストイングもしてあるから」

達哉

「一週間！」

蛍

「一週間ってそんなにすぐですか！？そんなの無理っすよ」

達哉

「ああ、大丈夫！あんたの出番は少ししかないから」

真太郎

「ええ！そうっすか。そりゃあ、嬉しいような、悲しいような……あの
おゝ頑張りますんで、もう少し出番を増やして頂けませんかね？」

真太郎

「それはお前の頑張り次第だな」

達哉 「お前が言うなよ。似た者同士なんだから」

蛍 「大丈夫よ。あんた達の出番も増えてるから」

真太郎 「ほんとスカ！？」

蛍 「うん」

真太郎・達哉 「ありがとうございます！」

蛍 「一週間後から稽古を始めます」

純玲 「蛍？なんで一週間後からなの？」

蛍 「この一週間でやることがあるのよ。(手紙を出す)これを渡さなきゃい

けないの」

楓 「手紙？送った方が早く着くんじゃないの？」

蛍 「これは直接渡さなきゃダメなのよ。沢山の想いが詰まっているから：

：約束したの！必ず届けるって！」

さくら 「誰と約束したのよ？」

蛍 「迷宮の人達よ！」

幕